

南山にてー中国とアメリカ、そして日本ー

「大連日記から」は、この回で終わりとなります。

留学先の大連という街の魅力の一つは、外国でありながら、日本とは戦前から縁が深い土地だったため、過去への郷愁と現代の体験とが重なり合う場所だという点だ。最初の大連行き(2004 年)以来、この街で気に入っている所と言えば、一つは南山と呼ばれる「中山広場」の南に展開する土地がある。ここには戦前、南満州鉄道(満鉄)が経営した病院があったり、東西の本願寺が置かれたり、そして当時の日本人の居住地が展開していた。南山には住宅街が今も残るが、その風景も今となって見れば新たな景観へと変わって来ている。



以前の南山の住宅街 こうした戦前からの住宅街が残っていた

日本人の住宅街は、戦後もそのまま使われたが、カーキ色の外壁に覆われ急こう配の屋根が葺かれたドイツ風の洋館が基調だった。こうした景観だった理由の一つは、この地区に旧ドイツ領事館が置かれていたことと関係しているかもしれない。この地味な装いは周囲の緑とあいまって、落ち着いた雰囲気醸成していた。そして、中国が豊かになりつつあった 21 世紀初頭、地区の高台の一街区、「楓林街」の両側に洋風とも日本的とも言えない、いやそれらが折衷された住宅の家並みが現れた。構造はコンクリート造が主体になっていたと思う。2004 年当時、新観光名所として私も案内されたことがあった。

さらに今回の大連市滞在。そこでお目にかかったのは、何とこれはアメリカのニューイングランドでは？と思える、かの地のレンガ造りの住宅をそのまま移入して来た住宅街が、かつてのドイツ風の住宅街を席卷している光景だった。



現在の南山の一画。アメリカ北東部のレンガ造りの住宅を思わせる家々が立ち並ぶ

この妥協を許さぬほどにアメリカの住宅を徹底して模した様を何と理解したらよいのだろうか？一言で言うと、海外にも目を向けている現代の中国人は、アメリカのような欧米先進国に相変わらず憧れをもち、そうした文明の模倣を厭わないと思っているのでは？ということだ。これは日本や韓国といった東アジア諸国に共通する指向ではないだろうか？日本にも TDL のようなアメリカ文明の一端を模したようなテーマパークがあるが、大連市を含む遼寧省には、欧州のチロルの郷をイメージしたログハウス風の家並みを揃えたテーマパークまであったりしている。

中国が超大国の様相を強めるここ二三年の姿を見ると、アメリカとの競争と対立が表面化し、両国は互いの相違を強調しているように思われる。もちろん、一方に社会主義をめざしそのためには国家による統制が不可欠だと思っている体制があるかと思うと、その対極に国民一人一人の自由こそが最大の価値と信じている自由主義国家が対峙しているわけで、対立は当然かもしれない。しかし日本人の私から見ると、両国の共通点も見えてくる。

わかり易い例で言えば、米中共に「大きなもの」が大好きなのではと思う。中国の都会に出現した超高層ビル街もさることながら、現代中国では、こぞって巨大な建造物が作られつつある。わかり易い例が、大空港の建設だ。今年年間 8000 万人が利用すると言う北京首都空港も、現在リニューアルし拡張中だが、私の大連滞在中の 2019 年に建設されていたのは、その首都の航空需要を補完する大興国際空港だった。3000m を越える滑走路を四本持つこの新空港には、単体では世界最大の 103 万 m² もの広さを持つターミナルビルが設けられた。(因み

にこの設計者は一度は東京の新国立競技場改築に選ばれたパキスタン人のザハ・ハディド氏だったそう)。この空港は将来的にさらに四本、滑走路を増設させることになっているそうだ。とにかく現代中国の指向として、巨大な構造物・建築物を作るのが目立っている。しかし、こうした巨大なものを作りたがるのは、中国だけではない。私が初めてアメリカに行った時に聞いたのも、かの国の国民の持つ巨大なものへの指向だった。訪れた大学では、アメリカンフットボールの競技場の大きさもさることながら、それを囲む来場者用駐車場に数万台のキャパシティがあったことに驚かされた。テニスコートも40面用意されているとか、びっくりすることが多かった。

実は、中国・大連でも、例の外国語大学が旅順市街地の手前に郊外移転したが、そのキャンパスも広大さを売り物にしていた。四月末にお邪魔したが、校内には人工の湖まであり、キャンパス内を徒歩で移動することにも難儀があった。しかも、隣接して大連医科大学までキャンパスを移転して来て、こちらも地図で見る限り何kmも構内を歩く羽目になりそうな広さだった。



大連外国語大学の新キャンパス 人工池の向こうに校舎の一部が望まれる

こうした規模の拡大にこだわる点で、米中はある意味でよく似ていると言える。そして、巨大指向の強い国民の政府が求めるものは、自らの勢力圏の拡大と言ったことに傾きやすいのだろう。だから、米中の対立が目立つのだ。今や、現代世界の懸念材料は、互いに妥協しないこの二大国が平和を脅かす関係へと進展しないかとする心配だ。

その中で、私の関心事は、やはり中国社会の行方である。国の内外で、強権的な姿勢が目立つからだ。その先頭にいるのは、習近平国家主席に違いない。清華大学の出身だそうだが、この大学は歴史を紐解くと百年前に時のアメリカ国務長官ジョン＝ヘイ氏が米国の資金を贈って開設した大学だそう。そこに学んだ習氏も、アイオワ州での研修に参加したとか、またその娘習明沢氏はハーヴァード大学卒だとか。何かと米国びいきの印象を受ける。

その習氏が率いる中国は、これまでの日記で触れたように、様々に「背伸び」しているようにも見える。そうした無理に気づいてこそ、より良い方向に向かうのではと思う。ところが、対外的には一国二制度を反故にして香港を飲み込もうとするし、台湾を脅かそうとしている。日本との領土をめぐつても、東シナ海ではかなり強硬だ。さらに南シナ海ともなると、周辺国との摩擦も辞さない強圧的な態度を取り続けている。こうした現実を前に、日本はその国益を考えれば、アメリカに頼らざるを得ないだろう。しかし、中国とアメリカが直接対立するようなことがあれば、それもまた日本にとってマイナスには違いない。今後もこの両大国の行方を注視して行くことになるだろう。

と、東アジアと世界を見渡してみたが、私の大連での個人的な経験から言えば、中国人もしょせん我々と同じ人情に生きた存在。ともに協力して生きて行くパートナーに違いないという思いだ。しかし、日本では今なお中国や韓国を相手にするときに、相も変らぬ民族的なヘイト感情が社会に目立つ。それは、庶民レベルで相手の社会を知れば知るほど、視野の狭い人間の妄想を伴っているのでは？と感じるものなのだが・・・。



まだまだ成長の余地があるのか、大連では大規模な海上空港を建設中。これは完成予想図。

帰国して間もなくして、高齢者の仲間入りを果たした私からすれば、この中国と言う隣人と付き合っていく時間もそれほど多く用意されてはいないだろう。しかし、この国の事情に少しは詳しくなった人間として、何らかの橋渡しをするための存在として生きて行くことは少しは意義があるのではと思っている。これからもこの国をせいぜいウオッチングして行くことに心がけようと思う。コロナが明けたら、また旅に出かけることもあると思う。その時は、もう少し中国語を使えるようにして行かなければと思う・・・。